

メディア論の生成と人工補完

—— メディア変容の現象学に向けて

張江洋直

●要約

本稿では、メディア論の生成あるいは1980年代中葉以降に生じた〈マクルーハン・ルネッサンス〉という思想的出来事そのものの理論地平を主題とする。周知のように、M. マクルーハンの一連のメディア論が上梓されるのは1960年代である。だが、それはマスメディア論においては強い影響力を示すものの、マクルーハン自身が自ら呈示したメディア論としてはあまりにも脆弱にしか受容されなかったといえるだろう。本稿では、この謎を、一方では、現代社会論の変遷から明らかにするとともに、他方では—— むろん、こちらがより重要ではあるが、当時のコミュニケーション研究における中心的モデルとされたシャノン・モデルの狭隘性から解明する。そのうえで、〈マクルーハン・ルネッサンス〉から現在的に継承すべき論点を、人間的な諸力の外化として捉えるマクルーハンの「環境」概念の動態的な理解に求め、さらにそれを A.R. ストーンに倣い「人工補完 (prosthetic / prosthesis)」と述語化する。そこにおいて、私たちが、じつは社会諸現象の存在論的な〈錯乱〉という決定的な事態に直面していることを明らかにするとともに、現在的に問われるべきは人工補完を内在化した新たな《生きられた脱構築の可能性の模索》であることを呈示したい。

●キーワード

メディア論
現代社会論
コミュニケーション
シャノン・モデル
サイバネティクス
人工補完
技術決定論
存在論
M. マクルーハン
A.R. ストーン